

丹波焼の里 ミュゼシター

2024
spring
summer

vol.
35

発行：やきものの里プロデュース倶楽部

丹波の手仕事 匠の技 21

丸八窯「流し掛け」

清水 久美子氏・義久氏

インタビュー

記念トークセッション

「産地でつくる、産地をつくる —丹波・備前・小石原」

市野 雅彦氏・隠崎 隆一氏・福島 善三氏



丸八窯 工房



丸八窯は、四斗谷川を挟んで兵庫陶芸美術館を真向かいに望む上立杭にあります。四代目の久美子さんに丸八窯の歴史についてお尋ねしました。「小学6年生頃に父（三代目）が他界、しばらくは各地から職人が来てくれ家業を継続していました。4姉妹の三女ですが、成り行きのまま自然と跡を継ぐことになりました。短大卒業後おそらく立杭の女性では初めて京都市立工業試験場に入所しました。卒業後、叶敏（かのうさとし）先生に弟子入りし、23歳で丹波に戻りました。24歳で結婚しましたが、職人の方々と丸八窯を守ってきました」

久美子さんは先代が製作されていた民藝の器を継承されています。得意とするのは、釉薬の流し掛けです。白化粧土を塗った小壺を手口クワで回しながら、口縁下にスポイトの鉛釉を等間隔に流していきます。スポイトを握る微妙な力加減で器面を這う釉薬の長さを調整し、長短をつけデザインを考えています。十数秒とかからない手慣れた様子に、これが手仕事の技と感嘆しました。器によっては、柄杓で釉薬を掛けて模様をつける打ち掛けをしたりと、バリエーション豊かな作品作りをされています。

ガス窯は久美子さんの担当ですが、毎年2月頃に焼成する穴窯は、五代目義久さんのお仲間手伝ってもらい五日五晩かけて焼いておられます。11月頃から準備に入るそうで、こだわりの作品制作に余念がありません。

また、義久さんは8年前から現代の生活スタイルに合ったカラフルな食器を手掛けておられます。飯碗は赤、黄、緑など6色で大きさは大・中・小と3種類。老若男女誰にでも使ってもらえる器を制作されています。「目立つ色彩ですが、技法はすべて丹波の伝統を踏まえたものです。これからも丹波焼らしい穴窯の作品も継承していきたいし、伝統を守りながら新しいモノづくりにも挑戦していきたい」と熱く語られます。

六代目はどうなるかわからないとおっしゃる久美子さんですが、春夏甲子園出場を目指すお孫さんの成長を義久さんと共に楽しみに見守っておられます。これからも末永く工房のロク口前に並んで作業をしているお二人の姿をお見掛けできることでしょう。

丸八窯 清水久美子・義久

〒669・2135

兵庫県丹波篠山市今田町上立杭363・1

電話/FAX 079・597・2102

文・佐藤詩子 写真・迫田隆



丹波の手仕事

匠の技 21

丸八窯「流し掛け」

清水久美子氏・義久氏



清水義久作 飯碗カラフルシリーズ

記念トークセッション

産地でつくる、産地をつくる — 丹波・備前・小石原

丹波 市野 雅彦 氏 備前 隠崎 隆一 氏 小石原 福島 善三 氏

聞き手：マルテル坂本牧子（兵庫陶芸美術館学芸員）



《記念トークセッション当日の記録を一部抜粋して掲載》

3人の先生方はそれぞれ伝統のある産地で制作されていますが、その経緯というのを話したいなと思います。

福島 私は昭和34年生まれなんですけど、30年代中頃から民芸ブームで小石原にも非常にたくさんのお客さんが見えなくなりました。窯元の数が10軒足らずだったのが、私が大学を卒業して小石原に帰ってきた20年後くらいには30数軒、それからどんどん増えて最終的には50数軒まで増えていました。小石原といえば、皆さんご存知かと思いますが、「飛び鉋」という点々とした模様や「刷毛目」が有名な時代だったんです。この中で自分も飛び鉋・刷毛目を持ちろん作らされたんですけど、面白くないんで、自分しかできないものを作ろうということで釉薬を勉強したというのがきっかけです。

隠崎 僕はもう焼物とは全く関係ない、五島列島で生まれて育って、大学を出てからすぐに食べられるようにということでデザイン、グラフィックの方に進んで、3年近く、そういう会社で仕事してきて、すけれども、なかなか喋りとか団体行動ができません。（デザインの仕事は）どうしてもみんなとスクラムを組まなきゃ仕事が進まない。で、陶芸の方は、一人でそういう作業ができるかな、というのが最初にあって、この世界に入ったのが26歳の時。それも備前という非常に伝統のある産地の中で。その当時は、バブルの最中で、陶芸家も陶工もたくさんいて、自分が独立するまで約10年修業したんですけど、もう粘土自体があと30年40年、供給されるかというのを考えた時、非常に危機感があったので、自分が勉強してきたものを生かして、自分は備前に関係した方がいいんじゃないかということ、もう最初からそういう造形的なもので行くのが僕の役割、仕事じゃないかなというのを意識して、今でもそれは

ずっと同じことですね

市野 学校を出て、京都で5年間修業して、昭和60年かな、丹波に帰ってきり作ってましたね。公募展が結構その頃多くて、年間に20ぐらい、公募展に出していた思い出があります。丹波自体も多分バブルはちよっと弾けてたんですけど、景気がよかったという思いはあります。

伝統的な産地で制作すること、それも個人作家が自分の作品を作っていくという中で、その産地から受ける影響など、ご自分の制作に向かうところでの関わり方などをお話いただければと思います。

福島 私が小石原で釉薬のことをやり始めて、皆さんが飛び鉋を作っている中で、釉薬の作品を作ると、先輩方から「小石原だったら『飛び鉋』と『刷毛目』だけ作ってきやいののに、何でお前そんな皆と違うことやるんだ」と言われたりして、「そうかなあ」と思ってた。平成元年に小石原の最も古い窯の発掘があったんで、それまで小石原というのは民藝とか、雑器とか民陶という生活用品の作品ばかりのイメージだったんですけど、そこから出てきたものは実は染付だったり青磁があったり、茶道具とか、そんなものばかり。三百年前のもっと古い小石原の焼物はそうなんですからと言えようになりました。公募展に出そうとすると、ぼくは普通の大学しか行ってませんから、絵が描ける人と絵の競争をしても負けちゃうし、絵が描ける人って、轆轤が以外とあまり得意じゃない方が多くて、それだったら、轆轤と釉薬で競争すれば戦えるんじゃないかという思いで釉薬の勉強をしたし、轆轤も、すごい数を挽きました。それで展覧会に出し始めたことですね。

隠崎 先生はやっぱデビューもすごく鮮烈でしたし、備前のニューエイジ、その代表みたいな感じで、色々批評されたんですけど、備前で制作する中で、絶対これはといったものがありましたか。

隠崎 相当たたかれました（笑）。切ったり貼ったり叩いたりする仕事でここが備前なんだって、まことに的確な表現を

していたら覚えたって、まことに的確な表現をね。自分がそうしなければいけないというわけでも、従来の備前とは違うものを作ろうと意識して始めたわけでもありません。とにかく手に入る土は非常に大事なことだったので、自然に修業を重ねていくとその土の魅力にのめり込んでいく。そういうその土が手に入るかといった危機感をもった時から少しずつ変わってきたというのはいま自分にとっては必然的なことだったわけですから。特別に備前に反発するとか、この古備前スタイルを否定するとかっていうことは全く違いますね。基本的には、僕は田舎生まれですけども、それが、非常に自分の中には土との関わりというのはいつもあるんだという、備前に来て45年経ちますが、ほとんど何も変わってない。だけど今、今を生きている自分とか未来に自分がどう陶芸と関わるかということとは常にどこかポケットに入れておいて、動いてるとい感じはしますね。何か違うものを作ろうという感覚じゃなくて自分なりのものができたというの、特別なことじゃないと思うんで。

市野さんは実は伝統工芸展に一回も出品されたことがないのですが、本展覧会の出品作家として作品を展示している。それぞれお立場があるんですけど、市野さんは、なぜ伝統工芸展に全く出品されなかったのですか。

市野 弟子入りした先生が日展の先生だったんで、そのもつと前は、日展にも伝統工芸展にも出していた時代があったのかも知れませんが、僕らの時代はもうどちらかに絞って、先生の後をついていくという時代だったんで、独立して丹波に帰ってきた当時は、土に対する思いは今とはちよっと違って、何か思い通りになる土を、自分で採ってきた土もそうなんですけど、作りやすい収縮率の少ない粘土にして、造形物を作りました。最近では、どちらかというと、土の本

来の土味を意識するようになったんですけど、帰ってきた頃っていいのは、丹波で焼物をやらなくてもいいかなというような仕事ばかりしてたような気がします。

福島 私はよく小石原らしくないねって、若いころからずっと言われてきました。最近お答えするのは、実は小石原で、伝統的な飛び鉋の技法って言われているんですけど、小石原の歴史350年の終わりの四分の一しかやってないんです。小石原に飛び鉋が伝わったのは、昭和7年って言われて、こちらの小石原に伝わったのはその後なんですけど、主にやり始めたのは、戦後なんです。実は最新の技法だったんです。それが、だんだん伝統と言われていく、そういうことを考えれば自分が今やっているいろんな釉薬とか色なんかも、誰かがやり始めたから、そのうち残ったものが伝統で、悪いものは淘汰されるという考えが良くて。小石原の粘土を使って、小石原の窯で、小石原の材料、木灰、長石、墨灰いろんな材料が小石原で採れるんです。鉄鉱石も採れる。それを使って焼けば、どこか小石原の匂いがあるんじゃないかって。香りと匂いとか、そういうものが全く違うように見えるけど、香りがすると思っています。香り匂いっていうのはそこから出てくるものがあるのかなっていう感じですよ。

その発想って面白いですが、香りと匂いというのは形に見えないものなんですけど、内側から醸してくるものというのが本場に大事なかなって。

隠崎 そうですね。福島さんのいる小石原というのは、我々の見る感じでは大きな窯元、産地というイメージがあるんですけど、それで、福島さんたちのような作風が最近出てきて、ずいぶん産地でも変わってきたんですよ。それは丹波もそうだと思うんですけど、備前も多少僕なんかの影響で変わってきた可能性もあるんですよ。それは変わらなきゃいけない部分もあったかもしれないんですけど、もう具体的にやっぱ変化したというのは、我々の生活スタイル、土壁とか畳と

兵庫陶芸美術館 2024年度 展覧会の見どころ

※イベントの内容は、変更・中止となる場合があります。
※最新の展覧会・講演会・ワークショップ等の情報は当館ホームページをご覧ください。

●特別展のご案内

2展同時開催

フィンランド・ガラスアート - 輝きと彩りのモダンデザイン - ムーミンの食卓とコンヴィヴィアル展 - 食べること、共に生きること -

3月16日(土)～5月26日(日)

1930年代から現代まで、北欧フィンランドを代表するデザイナーや作家たち8名が「アートグラス」と銘打って制作した芸術性あふれるガラス作品を通して、洗練されたフィンランド・ガラスアートの世界をご紹介します。合わせて、ムーミンの物語から食文化や共生をテーマとする原画や人形を紹介する展覧会も同時開催します。



カイ・フランク《Art-object, unique》1970年代前半
ヌーヤルヴィ・ガラス製作所 ©Collection Kakkonen Photo Rauno Träskelin

2展同時開催

受贈記念 高瀬正義コレクション 兵庫のやきもの探訪 - 五国の窯場を巡る - ○初代和田桐山 - 兵庫が生んだ名工 -

6月8日(土)～8月25日(日)

加西市在住の高瀬正義氏から近代に製作された兵庫のやきものを受贈しました。氏は、昭和34年(1959)に入手した丹波の壺を契機として、以降、県内産のやきものを網羅すべく積極的に作品を収集しました。本展では、氏が愛蔵した三田や珉平、打出、神戸絵付など、県内各地で作られた多彩なやきものを紹介します。

大正から昭和にかけて兵庫県尼崎市で活躍した名工・初代和田桐山(1887～1967)。本展では、近年当館が受贈した作品を足がかりに、色鮮やかで美しい色絵や金彩、繊細な線描による絵付けなど、高い技術を持って作られた優品によって、単なる写しにとどまらない、初代桐山の魅力に迫ります。



初代和田桐山
《赤絵鶴鹿園平水指》
20世紀前半
兵庫陶芸美術館



神戸絵付 《色絵風景園皿》
昭和時代
兵庫陶芸美術館
(高瀬正義コレクション)

兵庫陶芸美術館 〒669-2135 兵庫県丹波篠山市今田町上立杭4 電話：079-597-3961 (代表) HP <https://www.mcart.jp>

九谷赤絵の極致

宮本屋窯と飯田屋八郎右衛門の世界

9月7日(土)～11月24日(日)

赤絵の細密描写で名高い再興九谷の宮本屋窯(天保3～安政6年)。その存在は、明治以降の輸出九谷の誕生や発展につながりました。主工の飯田屋八郎右衛門は、赤絵細描に優れた手腕を発揮し、この様式は「八郎手」や「飯田屋」と呼ばれています。本展では、今に伝わる宮本屋窯の優品を一堂に会し、その魅力を紹介します。



宮本屋窯
《赤絵金彩松園彫形大瓶》
江戸時代後期
石川県九谷焼美術館

●テーマ展のご案内

丹波焼の世界 season 8

3月9日(土)～12月8日(日)

2017年、丹波焼は日本六古窯の一つとして日本遺産に認定されました。平安時代末期以降、800年以上にわたり時代の求めに応じて変化しながら作り続けられてきた丹波焼の世界をお楽しみ下さい。



丹波《壺》室町時代中期
兵庫陶芸美術館(田中寛コレクション) 兵庫県指定重要有形文化財

イベント案内

◆第18回「やきもの里 春ものがたり」

緑豊かな自然に囲まれたやきもの里で、様々なイベントを開催します。

- 期 間 5月3日(金・祝)5日(日・祝) 3日間
午前10時～午後4時まで
- 会 場 立杭陶の郷、各窯元、兵庫陶芸美術館など
- 内 容 立杭陶の郷・各窯元・最古の登窯

《立杭陶の郷・各窯元・最古の登窯》

- ワークショップ工房
4月28日(日)～5月5日(日・祝)
※4月30日(火)開催なし
- グループ窯作陶展・スタンプリリーなど
プレイベント 丹波焼「春の軽トラ市」
4月27日(土)10時～16時
兵庫陶芸美術館入口周辺

▼問合せ 丹波立杭陶磁器協同組合

電話：079-597-2034

《兵庫陶芸美術館》

- ▼問合せ 兵庫陶芸美術館
電話：079-597-3961
- ▼期 間 4月27日(土)～29日(月・祝)はプレイベントを開催。詳細は、ホームページでご確認下さい
- ※5月3日(金・祝)～5日(日・祝)は、展覧会観覧料を特別割引並びに特別展「観覧のお客様」先着50名様に丹波焼小皿プレゼント
- 一般1500円↓1200円
- 大学生1200円↓800円
- 70歳以上700円↓600円、高校生以下無料

おめでとうございます

- 令和5年度伝統的工芸品 産業功労者に対する大臣表彰
市野元祥(力)氏(壺 市) 大西誠一氏(丹誠窯)
- 令和5年度兵庫県技能顕功賞
市野元祥(力)氏(壺 市) 市野英一氏(市野英一窯)
市野浩祥(浩)氏(陶幸窯)

プレゼントのお知らせ

- 兵庫陶芸美術館・陶の郷・こんだ薬師温泉の招待券を3施設セットでペア5組10名様にプレゼント。
- 応募方法
ハガキに 〒住所・氏名・年齢・本紙の入手場所(○美術館など)・ご意見・ご感想をご記入の上、下記の宛先までお送りください。
- 締め切り
8月末日消印有効。応募多数の場合は抽選。
- 宛先
〒669-2135 丹波篠山市今田町上立杭4
兵庫陶芸美術館内「陶芸文化プロデューサー」宛
なお、ご応募頂いた方の個人情報(当選者への発送、本紙企画の参考以外の目的には使用いたしません。また当選発表は発送をもってかえさせていただきます。

丹波伝統工芸公園

立杭 陶の郷

丹波焼を『見る・作る・楽しむ』

- 〒669-2135 兵庫県丹波篠山市今田町上立杭3
- TEL.079-597-2034 FAX.079-597-3232
- URL.<https://tanbayaki.com>
- 【入園料】高校生以上 200円
小中学生 50円
- 【開園時間】AM10:00～PM5:00 (通年)
- 【休園日】年末年始
毎週火曜日
(但し、祝日は営業します。)

窯元横丁

丹波焼の50軒の窯元の作品を買うことが出来る「窯元横丁」。どこか懐かしくあたたかな空間で、ゆったりと買い物をお楽しみいただけます。伝統的な丹波焼からアーティスティックな作品まで、さまざまなやきものが展示販売されています。一つひとつの作品をじっくり手にとりながら、散歩気分で歩いてみてください。見ているだけでも楽しくなりますよ。

陶芸教室

丹波焼の郷で、陶芸体験してみませんか。小さなお子様からどなたでも、手びねり(粘土細工)や絵付け体験に挑戦していただけます。釉薬をかけて焼き上げてから、ご自宅まで宅配便で発送いたします。あなただけのオリジナルやきものをつくってみるのも楽しいですよ。